



TITLE:

3.研究会(Ⅱ 共同利用研究)

AUTHOR(S):

CITATION:

3.研究会(Ⅱ 共同利用研究). 霊長類研究所年報 1993, 23: 96-100

ISSUE DATE:

1993-09-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/164409>

RIGHT:

3. 研究会

明日の霊長類学

この研究会は研究所の創立25周年を記念して企画された。この種の企画では後ろを振り返ることが多いが、今回は敢えて前を見る、すなわち霊長類学の将来を展望することにした。スピーカーはこの研究所に現在勤務されている方2名、勤務されていた方2名、この研究所の大学院生であった方4名、現在大学院生の1名で、中堅若手を中心に選んだ。多くのスピーカーが霊長類研究所と現在所属されている大学研究機関の研究、教育、運営について知識を持っており、そのような複眼的な視点から霊長類学の将来への期待、研究所の研究、教育、運営についてご意見いただいた。指定討論者の意見も含め非常に活発な議論となった。特に研究所への注文には聴くべきものが多くあったと思う。

なお研究会終了後所内祝賀会が開催され多くの方々が参加された。

日時：1992年6月11日12日

場所：京都大学霊長類研究所

プログラム

6月11日（木）

霊長類の集団遺伝学の将来

（川本 芳，京都大・霊長研）

霊長類の免疫生化学の今後

（村山雄一，筑波霊長類センター）

霊長類の形態系統学の展望

（小林秀司，京都大・霊長研）

保護管理のための研究発展への期待

（大井 徹，農水省森林総研）

霊長類の野外研究の展望

（丸橋珠樹，武蔵大）

6月12日（金）

霊長類の発生生物学の展開

（山下晶子，日本大）

霊長類の神経科学の発展

（沢口俊之，京都大・霊長研）

霊長類の心理学への期待

（浅野俊夫，愛知大）

OBよりみたサル施設への期待

（千葉敏郎，岐阜大）

総合討論

指定討論者：石田貴文（東京大）、浜田穰（岡山理大）、中川尚史（シオン短大）、大石高生（電総研）、伏見貴夫（霊長研）

世話人：小嶋祥三，林基治，相見満，山極壽一
（文責 小嶋）

ニホンザルの分布と個体数と生息環境

日 時：1992年7月4日（土）－5日（日）

場 所：京都大学霊長類研究所

参加者：約50名

プログラム

1. アンケート調査の方法と問題点
林勝治（宇部短大）
 2. 過去の調査と比較しての兵庫県下の分布域と個体数の変化，大捕獲とその後の変化
清水聡，他（大阪大・人間科学）
 3. 愛知県下の分布と個体数の変動，その要因
金森正臣（愛知教育大・教育）
 4. 全国ニホンザルの生息環境と林業政策（造林，伐採，林道の資料から）
長岡寿和（大分短大）
 5. 大分県本匠村の猿害発生年代とその背景，環境変化
横田直人（大分短大）
 6. 群馬県における分布と個体数の変動，その要因
上原貴夫（長野短大）
 7. 日光地域のニホンザルの個体数変動
小金沢正昭（宇都宮大・演習林）
 8. 金華山島の群れサイズ，遊動域，生息頭数，出産率，初期生残率の10年のデータと環境要因
伊澤紘生（宮城教育大・教育）
 9. 栄養条件と繁殖そのモニタリングの視点
羽山伸一（日本獣医畜産大）
 10. 討論ーこれからの問題
- 世話人：杉山幸丸・山極寿一・後藤俊二

この研究会は1989－91年度の3年間にわたって行われた同名の計画研究のまとめとして行われた。

近年の環境変化に基づくいわゆる猿害の増加によって，各地で莫大な数の野生ニホンザルが「有害鳥獣」の名のもとに捕獲・捕殺されている。そんな現状の中で，はたしてニホンザルの分布や個

体数はどのような影響を受けているのだろうか。捕獲をしなければ増えていくのか。分布や個体数は増大しているのか縮小しているのか。

金華山では凶作年に個体数は大減少するが平常年の微増によってほぼ回復するさまが明らかにされた。日光では観光客によって随時餌付けされ、人慣れしたサルがやがて畑に田にと進出する過程が捉えられた。凶作年にも餌付けによる栄養特配があれば、個体数は減少なしの増加を続けることになる。一方、林業統計と狩猟統計は、薪炭林伐採と拡大造林が頂点に達した1970年より少し遅れて、猿害捕獲が急増し始めたことを示していた。もはや切る森さえなくなってしまったのである。林道の延長は観光客の車による奥地進出と、サルの人慣れと栄養供給につながったことをも示している。日本中が「日光」になり、「猿害」もまた全国化したのであろう。これらすべての研究が、さらに各地での詳細な実態解明の必要性を示唆していた。

(文責：杉山幸丸)

霊長類のアレルギー疾患とその実験モデル

1993年1月22日～23日の両日計画研究”ニホンザルの花粉症”の研究とりまとめを兼ねて以下の内容の研究会を開催した。

- 1月22日：セミナー・アレルギーの基礎
- S-1. 肥満細胞とアレルギー反応；稲垣直樹
(岐阜薬科大・薬理)
- S-2. 寄生虫感染とアレルギー；藤田紘一郎
(東京医歯大・医)
- S-3. 可溶性CD23 (s-FcεRII) とアレルギー；
末村正樹 (大阪大・医学部・第三内科)
- S-4. HLAとアレルギー認識；松下 祥
(熊本大・医)
- S-5. アレルギーのエピトープ；奥村 康
(アサヒビール・応用技研)

1月23日：ワークショップ・霊長類を用いたアレルギー研究。

- W-1. 臨床サイドから見た霊長類の花粉症研究；
横田 明 (東市民病院・耳鼻科)
- W-2. 霊長類 IgE の高感度サンドイッチ ELISA ；
有本やよい (生化学工業・東京研究所・応用研)
- W-3. ニホンザルの花粉症：その血清疫学的調査
ならびにアレルギー増加要因の考察；

中村 伸 (京都大・霊長研)

W-4. 霊長類のMHC-DQ遺伝子の解析；打樋利英子

勝又義直 (名古屋大・医)

W-5. ニホンザルBasophilの性状および反応性；
橋本道子 (口獣大・獣医)

W-6. タイプIIコラーゲンで誘発されるカニクイザルのコラーゲン関節炎における末梢血免疫細胞サブセットの変化；

寺尾恵治・藤本浩二 (*予研・筑波医用 霊長類センター・*予防衛生協会)

W-7. ニホンザルを用いた遅延型過敏反応の解析；
今村隆寿 (熊本大・医)

なお参加者は約90名で活発な討論がなされた。また参加者の感想・アンケートでは今後と同様な研究会の開催を希望する意見が多数あった。

(文責：中村 伸)

第1回類人猿研究会

— Field研究の現状と課題—

日 時：平成5年3月11日(木)12日(金)

場 所：京都大学霊長類研究所

プログラム

1 類人猿の現状と保護

座長：黒田末寿 (京都大)

オランウータンの現状と保護

鈴木晃 (京都大・霊長研)

マハレのチンパンジー研究の現状

西田利貞 (京都大)

ボソウのチンパンジーの現状と保護

杉山幸丸 (京都大・霊長研)

座長：鈴木 晃 (京都大・霊長研)

ボノボのボビュレーション動態と保護の現状

古市剛史 (明治学院大)

ンドキのゴリラの現状と保護

三谷雅純 (兵庫県博)

コメンテータ：上原重夫 (札幌大)

丸橋珠樹 (武蔵大)

2 Field研究の新しい話

座長：西田利貞 (京都大)

ゴリラは果実にこだわるか

西原智昭 (京都大)

チンパンジーにとって魅力的なメスとは何か

濱井美弥 (日本モンキーセンター)
ボッソウのチンパンジーの新しい話題

松沢哲郎 (京都大・霊長研)

コメンテータ: 早木仁成 (神戸学院大)

高崎浩幸 (岡山理大)

山極寿一 (京都大・霊長研)

3 総合討論: 類人猿の保護と研究の課題

座長: 杉山幸丸 (京都大・霊長研)

鈴木 晃 (京都大・霊長研)

1980年代を振り返りながらこれからの展望を
考える

高畑由起夫 (鳴門教育大)

インドキの類人猿の研究の行方

黒田末寿 (京都大)

コメンテータ: 諏訪 元 (東京大)

川中健二 (岡山理大)

竹中 修 (京都大・霊長研)

(研究会世話人: 鈴木 晃・山極寿一・

杉山幸丸・加納隆至・西田利貞)

野外における類人猿研究の分野で日本が世界的に占める役割は大きい。特にチンパンジーとボノボの長期的研究の継続は世界のこの分野の研究を大きくリードしている状態にあるといえる。日本の研究者グループはさらにマウンテンゴリラ、ローランドゴリラ、オランウータンにもそれぞれ業績を残し長期継続研究への体制を模索している。

熱帯林の保護の重要性とそこでのキースペースとしての類人猿の象徴性にもかかわらずこれらのフィールドでの研究の継続性への予算的長期見通しは全くたらず各個別研究者の努力にそれらは負っているだけで日本からのそれらへの視線は国際的期待にもかかわらず薄弱な状態である。

研究の発展と見通し又保護上の上記のような見通しとシステムづくりをめざして本研究会は計画されその第一回目として討論が交わされた。参加者 約40名

(文責: 鈴木 晃)

第22回ホミニゼーション研究会

「形態と分子からみたホミニゼーション」

日 時: 1993年3月18日(木)~19日(金)

場 所: 京都大学霊長類研究所

参加者: 約70名

プログラム

座長: 渡辺毅 (相山女学園大・人間関係)

1. 形態からみた霊長類の系統と分岐年代

相見満 (京都大・霊長研)

2. アフリカ中新世類人猿の進化

国松豊 (京都大・霊長研)

座長: 佐倉朔 (札幌学院大学)

3. 初期人類の進化—アウストラロピテクスを中心に

諏訪元 (東京大・理)

4. アジアにおける原人の進化

馬場悠男 (国立科博・人類)

5. 人類の起源と進化の研究の年代学的側面

—人類進化のTEMPOとMODEの解明に向けて—

鈴木正男 (立教大・一般教育)

6. ケニア北部サンプルホミノイドの年代—K-Ar法の信頼度について

板谷徹丸 (岡山理科大・蒜山研)

座長: 針原伸二 (東京大・理)

7. ミトコンドリアDNAからみたヒト上科の進化

宝来聡 (国立遺伝研)

8. 霊長類の進化系統樹を基礎にした新しいデータ解析への展望

齊藤成也 (国立遺伝研)

9. DNAからみた霊長類の進化と現代人の起源

長谷川政美 (統計数理研)

総合討論

司会: 竹中修・木村賛 (京都大・霊長研)

世話人: 相見満・加納隆至・木村賛・竹中修・

友永雅己

霊長類の系統に関する仮説は、近年めざましく変更が加えられてきた。そこで今回は、その現状を、とくにヒト科に焦点を当て、化石、分子および年代測定法の面からどこまで明らかになってきたのか、またそれぞれの分野が抱える問題点をとりあげた。

また総合討論では、最古の新世界ザルの年代の訂正にまつわる裏話、ヒト属の特徴、現代人の起源について、活発な議論がおこなわれた。

(文責: 相見満)

霊長類における種間雑種形成とその維持機構

日 時 : 1992年 8月10日(月)
場 所 : 京都大学霊長類研究所
参加者 : 約40名

プログラム

1. エチオピアのマントヒヒとアヌビスヒヒの例 雑種個体の分布の特徴

森 明雄 (京大・霊長研)

遺伝的特徴からみた移行帯の範囲とその変動

庄武孝義 (京大・霊長研)

2. 樹上性霊長類の混群形成と種の分化

三谷雅純 (京大・霊長研)

3. スラウエシマカクの例

雑種個体の外形特徴とその急激な地理的变化,
および異常個体の存在と繁殖不全について

浜田 稔 (岡山理科大)

渡辺邦夫 (京大・霊長研)

種母集団の遺伝的特徴と移行帯における地理的
な変異

川本 芳・竹中 修 (京大・霊長研)

針原伸治 (東京大・理)

種間の認知と他種への視覚的嗜好性にみられた
特徴

藤田和生 (京大・霊長研)

総合討論

世話人 : 竹中 修・庄武孝義・川本 芳・渡辺邦夫

霊長類は高等哺乳動物の中では、例外的に種間雑種が多く認められる分類群である。本研究会は、日本人によって重点的に研究されているアフリカのヒヒとアジアのマカクを中心に、種間雑種形成の今日的な問題に迫ろうというもくろみの下に開催された。まず森・庄武からエチオピアのマントヒヒとアヌビスヒヒの種間雑種に関する最新の知見が報告された。また、かなり行動の異なるマントヒヒとアヌビスヒヒの間での具体的な雑種形成のおこりかた、考えられる2種の接触の歴史などについて河合雅雄(ニホンモンキーセンター)及び岩本俊孝(宮崎大)からコメントがあった。三谷はアフリカの森林で混群を形成するゲノン類を中心に、生態的な資源利用と種の多様性を生み出す機構について、示唆的な問題提起を行なった。浜田・渡辺は、それぞれスラウエシマカクの雑種形成地域でみられる形態変異のクラインとその維持機構について議論を行い、川本・竹中・針原が血清蛋白やミトコンドリアDNAなどの混交の程

度について報告した。さらに藤田はスラウエシマカク種間の嗜好度について行なった実験結果を紹介した。マントヒヒとアヌビスヒヒ間の場合とスラウエシマカク各種間の場合とではかなり雑種形成のありかたに違いがあるものの、いずれもこの1-2年の新しい資料に基づいた進展があり、雑種形成と種の概念の問題について活発な討論があった。

(文責 : 渡辺邦夫)

脳神経系における遺伝子発現

日時 : 1992年12月4日(金)

場所 : 京都大学霊長類研究所

参加者 : 30名

プログラム

1. ハムスター視床下部視交叉上核における immediate early gene とサーカディアンリズム の光サイクル同調

安倍 博 (京大・霊長研)

2. キンドリングで増加するミトコンドリア由来 チトクロームオキシダーゼの遺伝子発現

小幡邦彦・児島伸彦 (国立生理研)

3. Rapid regulation of transcription factor zif268 gene expression in neuronal cells

David. W. Saffen (東京大・脳研)

4. 脳細胞初代培養系におけるプロモーター活性 の測定

中平健祐 (大阪大・たんぱく研)

5. 形成期のマウス神経系での膜たんぱく質A5 の発現と機能

川上厚志 (名古屋大・理)

6. G_o/N_o-G_o課題の学習がサル大脳皮質 のGAP43 mRNA発現に及ぼす影響

大石高生 (電総研)

7. 霊長類脳内生理活性ペプチド類の個体発達 に伴う発現動態

林 基治 (京大・霊長研)

世話人 : 林 基治・景山 節・安倍 博

近年脳神経系においてオンコジーン産物, トロフィックファクター, トロピックファクター, 神経ペプチド等の生理活性物質が神経系の発生発達, 学習記憶, キンドリングやサーカディアンリズムに関与する事が示されて来ている。

本研究会では、霊長類を含めた種々の動物を用いて各種生理活性物質の遺伝子発現を調べている研究者が集り、研究成果を発表すると共に、今後の脳研究における遺伝子発現研究の方向性を論じた。短時間であったが最新の情報交換と共に密度の濃い論議がかわされ有意義な会であった。

(文責：林 基治)